

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：32513

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K10483

研究課題名(和文) 学校と医療の文化的考察に基づく慢性疾患の子どもへの支援連携プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of an interdisciplinary support program for children with chronic illness considering cultural differences between education and health care

研究代表者

飯村 直子 (IIMURA, Naoko)

秀明大学・看護学部・教授

研究者番号：80277889

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：研究目的は「慢性疾患の子どもたちの安全で充実した学校生活の実現のために、学校と医療の文化的考察を踏まえた新しい連携プログラムを開発する」ことであった。まず学校文化における子どもの健康観、慢性疾患の子どもたちの学校生活に関する文献検討を行った。次に学校の教諭、慢性疾患の子どもと親、クリニックの医療者を対象にインタビューを実施し、学校の管理職や養護教諭の子どもたちの健康のとらえ方や慢性疾患の子どもへのかかわり、家族が学校生活について望んでいること、医療者からの学校や子どもと家族への働きかけ等について明らかにした。これらの成果をもとに、学校と医療、地域が共有可能な仕組みや具体的な方法について検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

慢性疾患の子どもたちの学校生活に関する現状や課題、学校教師や学校文化に関する実態や課題についての文献検討を行った上で、レイニンガーの民族看護学の方法を参考に、学校関係者、子どもと家族、医療者にインタビューを行った。それぞれ異なる立場や文化を有する人々から、子どもに関する健康観、慢性疾患の子どもへの実際のかかわり、学校生活に望んでいること、学校への働きかけと子どもと家族への支援の実態について、話を聴くことができた。これらを詳細に分析し、慢性疾患の子どもたちの学校生活の質向上をめざす、学校と医療関係者との学校文化を尊重した連携を検討するところに学術的な意義や社会的な意義が認められる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to "develop a new collaborative program that takes into account the cultural considerations of schools and medical care in order to realize a safe and fulfilling school life for children with chronic diseases." First, a literature review was conducted on the school culture's view of children's health and the school life of children with chronic diseases. Next, interviews were conducted with school teachers, children with chronic diseases and their parents, and medical professionals at clinics to clarify 1) how school administrators and school nurses perceive children's health and their interactions with children with chronic diseases, 2) what families want from school life, and 3) how medical professionals can approach schools, children, and their families. Based on these findings, a system and specific methods that can be shared between schools, medical care, and the community were examined.

研究分野：小児看護学

キーワード：慢性疾患の子ども 学校 文化 連携

### 1. 研究開始当初の背景

近年の医療技術の進歩発展に伴い、慢性疾患のある子どもたちの多くは家庭で生活し、外来やクリニックで通院治療を受けながら地域の学校に通学している。慢性疾患の子どもたちがより良い学校生活を送るためには、学校現場の教師や友だちの理解が欠かせない。しかしながら、これまでの小児保健や医療、看護等の研究では、こうした子どもたちの支援に関して、学校の養護教諭との連携に関するものは多くあるが、実際に子どもと毎日接している担任教師や学校管理者との連携に関する研究はあまり見られない。担任教師は子どもの健康について、基礎教育でも学校現場でも知識を得る機会が少なく、子どもの健康管理については自分の役割とみなしておらず、慢性疾患の子ども健康管理等について養護教諭に任せていることが多い。中には非常に意識が高い教師もあり個人差があると思われるが、慢性疾患の子ども側から見れば、どのような教師が担任になるのかは運任せのような状況にある。医療者は子どもたちを日々見守っている担任教師にアプローチし、連携を図る必要があると考えられる。

一方、日々の学校生活の中で、担任教師は多くの役割を持ち多忙を極めている。特に担当するクラスにおいては、子どもたち全員に対し責任を負っており、慢性疾患の子どもだけに注目することは難しいという事情もあるだろう。クラスの中にいる子どもが慢性疾患を抱えている場合には、その対応について戸惑っており、支援を求めているかもしれないが、その実態は明らかにされていない。また、このような子どもたちの支援について、学校管理者はどのような意識を持ち、学校内での支援体制をどのように図ろうとしているのかについては明らかにされていない。このように考えたときに、慢性疾患の子どもたちの学校生活について学校の教師と連携をとりたいと思っている医療者は、学校という組織や教師の立場、役割等についてはその現状を理解していないことに気づく。子どもたちが通う地域の学校には医療現場とは違う文化があり、その中で子どもたちは教師の指導を受け、日々勉学に励んでいる。慢性疾患の子どもたちが、学校の中で友だちや先生とともに楽しく有意義な日々を送るためには、学校およびそこに生活する子どもたちと教師等が形作る文化を理解し、そこを基盤として学校と医療の連携を考えることが必要であると考えられる。

### 2. 研究の目的

慢性疾患の子どもたちの安全で充実した学校生活の実現のために、学校と医療の文化的な考察を踏まえた両者の新しい連携プログラムを開発する。

(1) 慢性疾患の子どもたちの学校生活に関する現状や課題(疾患管理、他児との関係、いじめなど)について、文献および関連するエキスパートとの討議によって検討する。慢性疾患の子どもたちにかかわる学校教師や学校文化に関する実態や課題(学校の組織文化、教育課程カリキュラムなど)について、文献および関連するエキスパートとの討議によって検討する

(2) 上記の検討をもとに、慢性疾患の子どもにかかわる小学校、中学校において、フィールドワークを実施し、学校管理者および養護教諭に面接調査を実施する。また、慢性疾患の子ども保護者が所属する親の会の活動に参加し、子どもおよび保護者に面接調査を実施する。さらに、子どもが通院する小児科外来およびクリニックでフィールドワークを実施し、学校と医療機関との連携に関する事例を医療者から収集する。

(3) 上記の(1)および(2)の結果をもとに、子どもと家族を中心とした学校関係者と医療者の新しい連携プログラムを開発する。

### 3. 研究方法

(1) 慢性疾患の子どもたちの学校生活に関する現状や課題(疾患管理、他児との関係、いじめなど)について文献検討を実施し、その現状と課題を検討した。また、慢性疾患の子どもたちにかかわる学校教師や学校文化に関する実態や課題(学校の組織文化、教育課程カリキュラムなど)について文献検討を実施し、その実態や課題を検討した。

(2) 小学校・中学校の組織や現場の状況、また教師の役割や負担など慢性疾患の子どもが過ごす場所としての学校文化はどのようなものかを明らかにすることを目的に、首都圏の学校に勤務する学校管理者3名および養護教諭5名を対象に、子どもの健康に対する考え、子どもの健康について日常的に行っていること等を中心にインタビューを実施し、質的に分析した。

(3) 慢性疾患の子ども家族が、子どもの学校生活について思っていること、望んでいることを明らかにすることを目的に、首都圏にある慢性疾患をもつ子どもの家族会を通して研究依頼をした慢性疾患の親たち19名に、学校生活をどのようにとらえているか、どのような学校生活を送ってほしいか、子どもにとって安全で充実した学校生活とはどのようなものか、学

校にどのようなことを望むか等について、グループインタビューを行い、質的に分析した。

(4) 関東および中部地方にある小児科クリニック4施設の小児科医3名、看護師9名に対して、慢性疾患の子どもへの療養や学校生活に関して、クリニックが行う子どもと家族への支援、また、医療者から学校への働きかけについて明らかにする目的で、個別インタビューあるいはグループインタビューを実施し、質的に分析した。

(5) 上記の(2)(3)(4)の調査に先立ち、所属大学の研究倫理委員会に研究計画書を提出し、審査を受け、承認を受けた。調査の準備、実施、データの分析などについて、分担研究者、研究協力者を含む小児看護専門家からなる研究チームで行った。

(6) これらの調査、研究結果を踏まえ、子どもと家族を中心とした学校と医療者の新しい連携プログラムの検討を行った。

#### 4. 研究成果

(1) 文献検討および課題検討の結果、学校では養護教諭を中心に、担任教師らが日々子どもの健康を捉え、守っていたが、学校には「病気の子どもには無理をさせないこと」、「子どもの社会参加は病気が治ってから」という考えが根強くあり、慢性疾患の子どもが安全で充実した学校生活を送るための支援体制は乏しく、緊急時の実践等に課題があった。特に担任教諭は教員養成課程やその後の研修でも、子どもの病気や支援方法について学ぶ機会は少なく、日々試行錯誤を繰り返しながら慢性疾患の子どもたちに対応していた。慢性疾患の子どもたちの学校生活を支えるためには、子どもと家族、学校関係者、医療の連携が望まれるが、三者の間には壁があり、特に医療と学校との連携に関しては、長期入院後の復学支援時に限られており、現状では継続的な連携はあまり進んでいないこと、学校と医療、地域が共有できる仕組みや具体的な方法の検討が急務であることが明らかになった。

(2) 慢性疾患の子どもに関わる学校の管理者(学校長等)にインタビューを実施した結果、学校の管理職は、健康には「体の面と心の面」があり、その両方がよい状態が健康である、いろいろな「特別扱い」があり、その一つが病気である、命に関わることを最優先し、学校全体でフォローする体制を整える、管理職としての役割がある、子どもが自分やクラスメートの体調の変化に気づいて報告できることが子どもの健康を守ることにつながる、保護者との信頼関係を崩すわけにはいかないと考えていることが明らかになった。また、養護教諭は、学校にいる子どもは通学できる健康レベルであることを前提とし、子どもが家庭でも学校でも基本的な生活を送れることを目標に、学校生活では集団としての健康上の安全を守ることができるよう、学校全体の環境を調整しようとしていることが明らかになった。

(3) 慢性疾患の子どもへの家族へのグループインタビューを実施した結果、学校生活において家族は、教員には正しい知識をもち、子どもをしっかり見て、子どもの訴えに耳を傾けてほしい、統一されたルールによって安全を守る基盤を整えたい一方で、子どもの個別性や成長発達に伴う変化にも臨機応変に対応してほしい、配慮が必要な子どもが自分の子どもだけでないことは理解した上で、分かってもらう姿勢を見せてほしい、一生懸命病気に向き合っている子どもを見てほしいと思っていた。学校を取り巻く環境は大きく変化しており、学校の置かれた状況や特徴を考慮した家庭・学校・医療の連携が必要であることが明らかになった。

(4) 慢性疾患の子どもが通院している医療機関の医師、看護師への個別あるいはグループインタビューを実施した結果、医療者は地域の連携システムを活用しつつ、不足の部分は別の方法で連絡する等、学校の文化や役割を考慮してキーパーソンを見極めたり、逆に医療者の文化や役割を活かして働きかけようとしていたりしていた。子どもと親を支え、時に学校との橋渡しをしながら、慢性疾患の子どもと家族がより健康で豊かな学校生活を送れるよう支援している。今後は、医療と学校、親子三者それぞれの文化的背景を視野に入れた連携の在り方を考えていく必要があることが示唆された。

(5) 以上の結果を踏まえ、子どもと家族を中心とした学校と医療者の新しい連携プログラムの検討を行った。その過程において、学校関係者と医療者との、慢性疾患の子どもへの支援に関する認識の違いを整理した。学校関係者は、学校ではすべての子どもの安全を第一に考え、子どもが安全に過ごせる環境づくりと維持に努めていた。また、病気の子だけを特別視するのではなく、すべての子どもを特別と考えていた。一方、医療関係者は、健康や病気は個人差があり、個々への配慮が必要だと考えていた。両者の観点の違いを踏まえて、より良い連携体制を創造することが求められていると考え、更なる課題に取り組む準備を進めている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 原 加奈	4. 巻 31
2. 論文標題 学校生活を送る慢性疾患の子どもへの支援に関する文献検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本小児看護学会誌	6. 最初と最後の頁 102-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20265/jschn.31_102	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Nishida Shiho
2. 発表標題 School Life of Children with Chronic Diseases What is the Difference between the Views of School Officials and Medical Staff ?
3. 学会等名 EAFONS 2023: 26th East Asian Forum of Nursing Scholars（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 金丸 友
2. 発表標題 慢性疾患のある子どもの学校生活について家族が望んでいること
3. 学会等名 日本小児看護学会第33回学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 金丸 友
2. 発表標題 慢性疾患の子どもが過ごす場所である地域の学校の管理職による健康のとらえ方・守り方
3. 学会等名 第69回日本小児保健協会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 西田志穂
2. 発表標題 慢性疾患の子どもが過ごす場所である地域の学校の養護教諭による健康のとらえ方・守り方
3. 学会等名 第69回日本小児保健協会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 西村実希子
2. 発表標題 慢性疾患の子どもに対する医療と学校との連携の実際 第1報 クリニックから学校への働きかけ
3. 学会等名 第30回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 吉野 純
2. 発表標題 慢性疾患の子どもに対する医療と学校の連携の実際 第2報 - クリニックにおける子どもと家族への支援 -
3. 学会等名 第30回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 杉本晃子
2. 発表標題 学校と医療の文化的考察に基づく慢性疾患の子どもへの支援に関連する文献検討 第1報学校という文化における子どもの健康のとらえ方、守り方
3. 学会等名 第66回日本小児保健協会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 飯村直子
2. 発表標題 学校と医療の文化的考察に基づく慢性疾患の子どもへの支援に関連する文献検討 第2報慢性疾患の子どもの学校生活に関する現状と課題
3. 学会等名 第66回日本小児保健協会学術集会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	金丸 友 (Kanamaru Tomo)  (20400814)	千葉県立保健医療大学・健康科学部・准教授  (22501)	
研究分担者	吉野 純 (Yoshino Jun)  (50269461)	日本赤十字看護大学・さいたま看護学部・教授  (32693)	
研究分担者	西田 志穂 (Nishida Shiho)  (60409802)	共立女子大学・看護学部・教授  (32608)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	杉本 晃子 (Sugimoto Akiko)	共立女子大学・看護学部・専任講師	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	原 加奈  (Hara Kana)	秀明大学・看護学部・専任講師	
研究協力者	西村 実希子  (Nishimura Mikiko)	共立女子大学・看護学部・助教	
研究協力者	三池 純代  (Miike Sumiyo)	秀明大学・看護学部・助教	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関